

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：82619

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02441

研究課題名（和文）アイヌ民族の衣文化交流 博物館資料から北東アジア史を見直す

研究課題名（英文）Clothing culture of the Ainu: Reexamination of the Northeast Asian history from museum collections

研究代表者

佐々木 史郎（SASAKI, SHIRO）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・国立アイヌ民族博物館設立準備室・部長

研究者番号：70178648

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,200,000 円

研究成果の概要（和文）：日本列島北部を含む北方ユーラシア地域の南縁には、20世紀初頭まで固有の繊維（樹皮、草皮、獣毛など）を材料にした糸を織る独自の織布技術と織布文化が広がっていた。それには、ペダル式織機や地機を使う平織、開孔板綜織を使う平織（帯織）、それに桁と菰槌を利用するもじり織りなどが見られた。しかし、20世紀以降それらは次々に失われ、現代まで継承したのはアイヌだけであった。アイヌは独自の織布文化を維持しただけでなく、綿、絹、合成繊維など多種多様な外来布を駆使して、色鮮やかな着物を作り出した。衣文化はアイヌの民族アイデンティティを支える重要な文化要素となり、そのことがまた独自の衣文化を維持することにもなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は従来注目されていなかった北方ユーラシア寒冷地域の独自の織物文化を掘り起こすとともに、それを担った人々の歴史と文化にどのような意味があったのかを考察し直した。その中でアイヌだけでなく、ロシアやインドネシアなど海外の先住民族の工芸家たちからの協力も得て、独自の研究を推し進め、研究が先住民族文化の復興、振興のためのどのように貢献できるのかということを模索した。また、従来注目されていなかった織布技術に光を当てることで、アイヌを始め、北方ユーラシア地域の先住民族の文化の研究に新たな領域を開拓することができた。

研究成果の概要（英文）：The peoples in Northern Eurasia, including the northern part of Japanese Archipelago, had original weaving techniques and culture until the beginning of the 20th century. They weaved threads made of bark fiber, grass fiber, and animal hair to make cloths of plain weaving, using treadle looms, ground looms, and board heddles with slits and holes. Some of them weaved mats and tapestries with the twisting technique. While, however, many gave up the original techniques and equipment in the modernization process during the 20th century, only the Ainu, who are the indigenous ethnic group of Hokkaido, Sakhalin, and the Kuril Islands, maintain them even today.

The Ainu have also developed colorful clothes using various kinds of cloths made of cotton, silk, and synthetic fibers, as well as original natural fibers. The weaving-clothing culture is one of the most important cultural items that support their ethnic identity, and this fact encourages the people to maintain the traditional weaving.

研究分野：文化人類学

キーワード：アイヌ 衣文化 織布技術 鞆皮 木綿 絹 交易 博物館

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成26年度から28年度まで実施した「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」(基盤研究B 海外学術研究)と題した科研費による研究プロジェクトでは、ロシアと日本の博物館の収蔵庫で、西シベリア、南シベリア、極東ロシア、サハリン、北海道、千島列島などで収集された先住諸民族の衣類と織機の調査を行った。その結果、気候の関係で毛皮素材が主流とされていた寒冷地域でも、独自の紡績技術と織布技術を持ち、見事な衣類や敷物類を製作していたことが判明した。その過程で、北方地域の中でもアイヌの人々が最も高度に独自の織布技術を発達させていたとともに、彼らの衣文化が周辺地域との活発な交易、交流に支えられているという事実にも気付かされた。本研究プロジェクトでは前回の調査の成果を踏まえて、アイヌ民族の衣文化に焦点を当て、北海道と本州の博物館、さらにはロシア、ヨーロッパの博物館に収蔵されている資料を対象として、その素材、縫製技術、装飾技法、スタイルなどを詳細に観察し、データベース化して、アイヌの衣服と繊維製品を徹底的に分析する。そしてその結果を北東アジア史の枠組みの中で解釈し直し、アイヌ民族の歴史と文化についての新しい見方を提案するとともに、伝統技能継承者の協力を得て、研究成果を実践に応用し、あわせて伝統技能の継承、発展に寄与することを目指す。

2. 研究の目的

本研究プロジェクトは前回のプロジェクトである「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」(基盤研究B 海外学術研究、平成26年度～28年度)の成果を受けて、以下のような目的を持って研究を行った。

- 1) アイヌ独自の織布技術史の解明。出土遺物や博物館に所蔵される伝世品の観察と分析を通して、樹皮繊維や草皮繊維(両者ともに樹皮の内側のしなやかで丈夫な韌皮の部分を裂いて繊維状にすることから、韌皮繊維とも呼ばれる)を使った衣類の製作技術の変化、推移を追う。
- 2) 絹、木綿、レーヨンといった外来素材の分析による衣服製作年代の絞り込み。例えば、小袖由来の布や木綿の場合には織り、刺繍、染めなどの技法からある程度年代を絞り込むことができる。レーヨンなどの人工素材は開発された年代が特定できるので、それ以降であることがわかる。素材と衣服の製作年代との相関性を確認して、これまで製作年代や使用年代が不明のものが多かったアイヌ衣関連資料の年代にある程度の目安をつけることが可能になる。
- 3) 技術の検証。博物館が所蔵する伝世品や考古学遺物から復元できる樹皮繊維や草皮繊維の糸や布の製作技術を、アイヌ民族出身の技術伝承者の協力を得て再現してもらい、それが現実的なものであるかどうかを検証する。
- 4) 前回の科研に引き続き、アイヌ以外の北方ユーラシアの独自の織布文化、特にプリヤートとハンティの織機と布の調査と復元。アイヌの織布文化の現状をプリヤート他の北方ユーラシアの諸民族と比較して、なぜアイヌでは根強く独自の織布文化が残り、他の民族では残り得なかったのか、あるいは大きく変容してしまったのかについて考察する。
- 5) 上記1)～4)の調査分析を通して、アイヌ衣文化の従来見えなかった側面を明らかにしつつ、アイヌ民族誌、アイヌ文化史、さらには北東アジア史に新しい潮流を起こしていく。

3. 研究の方法

3.1. 調査対象

主要な調査対象としたのは、①日本各地、あるいは世界各地の博物館に所蔵されているアイヌの衣類資料と布資料、繊維資料、②アイヌの技術伝承者の糸作りと布織りの現場とその結果制作された作品、③博物館に所蔵されている北方ユーラシア諸民族の衣類資料や繊維資料、④北方ユーラシア諸民族の技術伝承者の糸作り、布作りの現場とその作品、そして⑤北海道、サハリン、アムール川流域、沿海地方、カムチャツカ半島等の遺跡から出土した繊維遺物、さらにアイヌや北方ユーラシアの事例との比較対象として、⑥東南アジアの諸民族の糸作り、織物作りの現場と、⑦日本の本州以南の考古遺跡から出土した繊維遺物も調査・分析の対象とした。

3.2. 調査分析方法

調査分析方法は前回の科研と同じく、博物館の資料に関しては、現物のa)熟覧、b)全体写真撮影、c)部分写真撮影、d)接写カメラを使用した拡大撮影、e)博物館の記録による資料の基礎情報の収集、f)博物館の学芸員あるいは資料保存担当者への聞き取りによる資料の背景情報の収集、である。資料の基礎情報(収集関連情報、製作者・製作地関連情報、法量、収蔵状況など)は博物館に残る記録類から、記録に残されていない付随情報は博物館員からの聞き取りで得られた。

博物館での調査と並んで、繊維製品を製作する工房での調査も実施した。このプロジェクトでは、職人たちに従来にはなかった新しい方法にチャレンジしてもらうことにしたために、工房であらかじめこちらの調査意図を説明し、十分な準備期間を設けて実施してもらった。さらに、作業を途中で一時中断してもらって調査時期に合わせて再開してもらい、作業風景を動画と静止画に収めさせてもらった。今回のプロジェクトでは後述の3地点で調査を行った。

今回の科研では、博物館での調査と現地での職人たちの協力による実地調査以外に、資料の科学分析を行った。それは、前回のプロジェクトの最後に訪れたカムチャツカ州立総合博物館でいただいた出土繊維資料の断片の材質と年代測定の分析である。分析自体は専門のラボに依頼し、

材質については電子顕微鏡を用いた微細な観察と既存の植物の電子顕微鏡写真との比較、年代については放射性炭素同位体（ ^{14}C ）を用いた測定を行った。その結果はあらかじめ与えられた情報と整合するところ、食い違ふところがあり、興味深い結果となった。それについては研究協力者の右代啓視氏（北海道博物館研究部長）の論考を、「4. 研究成果」のところで触れる報告書に掲載した。

3.3. 調査した博物館、調査した現場

調査した博物館は前回の調査ほど多くの博物館を訪れなかったが、1つ1つの博物館ではじっくりとした調査を行った。

日本国内では、本州側では東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館、宮城県立東北歴史博物館、日光東照宮宝物館、東京国立博物館、早稲田大学會津八一記念館、日本民藝館、立教小学校、静岡市立芹沢銈介美術館、新潟県立歴史博物館、福井県立若狭歴史博物館、若狭三方縄文博物館、国立民族学博物館、天理大学附属天理参考館、松浦資料博物館などを調査した。北海道では北海道博物館、北海道埋蔵文化財センター、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション植物園博物館、小樽市総合博物館運河館、苫小牧市美術博物館、アイヌ民族博物館、倶知安風土館、函館市北方民族資料館、函館工業高等専門学校、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、萱野茂二風谷アイヌ資料館、釧路市立博物館、中川町エコミュージアム、オホーツクミュージアムえさしなどで調査を行った。

海外調査では、ロシア連邦サハリン州ユージノサハリンスク市のサハリン州郷土博物館でアイヌとニヴフ、ウイльтаの衣類関連資料を、ブリヤート共和国ウラン・ウデ市のザバイカル地方民族学博物館とイルクーツク州イルクーツク市のイルクーツク州郷土博物館、イルクーツク市歴史博物館、ウスチ・オルダ村のウスチ・オルダ民族博物館でブリヤートとセメイスキエ（ロシア正教古儀式派）の製糸技術と織布技術を調査した。また、アメリカ合衆国ニューヨーク市のアメリカ自然史博物館とワシントン D.C.にあるスミソニアン協会国立自然史博物館でも若干のアイヌの衣服の調査を行った。

工房での調査は、今回のプロジェクトでは3地点で行った。1ヶ所目は北海道平取郡平取町二風谷である。ここではアイヌのオヒョウの靱皮繊維からの糸作りのようすとその糸を使った織りの調査を行った。まず、2017年、18年、19年と3年続けてオヒョウの木の皮剥を調査した（皮剥作業に参加）。また、17年には機織り職人の人たちに協力してもらって、現在伝承されているオヒョウの靱皮繊維の糸作りとは異なる方法での糸作りに挑戦してもらった。

2ヶ所目はインドネシア、バリ島東部のトゥングナン村で、そこでは2017年の夏と秋、2018年の初夏にシュロの繊維を紡ぐ技術とタテもじり織り（タテもじり編み）による簾作りの調査を行った。

3ヶ所目は南シベリアで、2018年にロシア連邦ブリヤート共和国のウラン・ウデ市とタルバガタイ村、2019年にイルクーツク州のイルクーツク市とウスチ・オルダ地区で調査を行った。そこで調査したのは、ブリヤートとセメイスキエと呼ばれるロシア正教の少数派の人々の糸作り、織機、織布技術である。ブリヤートについては、西部のグループが伝統として保持してきた馬のたてがみの糸作りと織物の調査を行った。ロシア系移民とセメイスキエに関しては、亜麻と羊毛の糸作りと古い織機の調査を行った。

4. 研究成果

今回のプロジェクトの成果は、前回の成果も加味した上で、研究代表者が編集した報告書『アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化』（国立文化財機構東京国立博物館、国立アイヌ民族博物館設立準備室、2020年）にまとめた。そこには研究代表者、分担者、協力者の6名が執筆した論考6編と付録として資料分析結果が含まれている。主要な成果はそちらに反映されているが、ここではそこに盛り込むことができなかった成果を上げておく。

4.1. 国内の博物館や研究機関における資料調査の成果

4.1.1. アイヌ・北方民族テクスタイルデータベースの制作

このデータベースは国内外の45館での調査資料の基礎的なデータと調査者の所見を盛り込んだアイヌと北方諸民族の衣文化に関するものである。この作業は本来前回のプロジェクトですべきものだったが、今回のプロジェクトでの補足調査結果も交えてより充実したデータベースとした。2019（令和元）年度中にデータ共有に同意していただいた37の博物館にそれらの館の資料のデータを盛り込んだデータベースを配布した。データベースの設計は主に研究分担者の日高真吾と研究協力者の和高智美が担当し、情報の入力には関係者全員が行った。

4.1.2. 工芸的な美を有するアイヌの衣装コレクション

国内調査であげることができた成果の一つに、20世紀前半までのアイヌの衣服作りの技術の高さとセンスの良さを確認できたことをあげることができる。それは静岡市立芹沢銈介美術館、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館、日本民藝館などに収蔵されている資料からうかがい知ることができる。例えば、柳宗悦が創設した日本民藝館収蔵の赤い毛織物をベースにして、白い木綿で切伏刺繍を施した衣服、静岡市立と東北福祉大学の博物館に収蔵される、人間国宝の染織家芹沢銈介のアイヌ衣服コレクションの中の木綿衣、樹皮衣（アットウシ）、草皮衣（テララペ）などである。いずれも遅くとも大正時代以前の制作と思われるもので、柳や芹沢の技と美に対する厳

しい基準をクリアしたもののばかりである。この調査には研究代表者、研究部分担者の吉本忍、研究協力者の宮地鼓、福田絵梨子が参加した。

4.1.3. 蝦夷錦についての新たな知見

アイヌにとっては外来の衣服である「蝦夷錦」でも新しい発見があった。それは釧路市立博物館と東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に収蔵されていた 2 領の藍色の衣服である。両者ともに細い藍色の絹糸を「紗」と呼ばれるからみ織りの技術で織った布地をベースにしており、そこに五爪の竜の刺繍が施されていた。特に、釧路の資料はおそらく北京の宮廷で使われることを前提にした高官の夏服だったと考えられる。からみ織りの布地は目が粗いために、風通しがよく、夏服に使われる。清朝の規定でも「緞紗」と呼ばれる布が登場する（『清会典図』巻五七冠服一）。また、中国の宮廷服によく見られる袖の黒い部分には「紹」と呼ばれるやはりからみ織りの技法を取り入れた布地が使われている。ただし、両者ともに北方からの由来を表す「山丹服」、「蝦夷錦」という名称が付されているが、その出所は定かではない。

釧路市立博物館の調査には研究代表者とともに研究分担者の吉本忍、齋藤玲子、研究協力者の右代啓視、宮地鼓、城石梨奈が、東北福祉大学の調査では研究代表者の他、宮地鼓が参加した。

4.1.4. 新しいアイヌ資料の所蔵先

従来アイヌ資料があると思われていなかった新しい施設や場所からもアイヌ資料が見つかった。それが立教小学校と函館工業高等専門学校での調査である。立教小学校所蔵のアイヌの衣類は、蝦夷錦を仕立て直した和風の衣服と切伏文の木綿衣 3 着、刺し子の木綿衣 1 着、それに手甲の計 5 点である。それらは木彫などの他の資料とともに、おそらくバチラー八重子（聖公会の宣教師でアイヌの言語文化の研究でも有名なジョン・バチラーの養女）からの寄贈と思われる。立教小学校とは聖公会を通してつながっていたと考えられる。函館工業高等専門学校では、下北半島の旧家で保存されていたアイヌの木綿衣を調査した。所有者と高専の中村和之教授のご厚意によるものである。「チカルカルペ」と呼ばれる木綿衣の類いで、縫製と刺繍の技術は確かで、100 年以上経過していると思われるが、保存状態は非常によかった。

立教小学校での調査には研究代表者とともに、研究分担者の齋藤玲子、研究協力者の中村和之、田村将人、函館高専では研究代表者とともに、齋藤玲子、宮地鼓が担当した。

4.2. 海外調査の成果

4.2.1. ロシア連邦ブリヤート共和国、イルクーツク州

海外調査の成果でまず挙げるべきは、ロシア連邦ブリヤート共和国とイルクーツク州で実施したブリヤート（特にバイカル湖よりも西にいる西ブリヤート）のウマの毛の繊維を使った織物の調査である。この織物の研究は前回のプロジェクトからの継続だが、今回は糸と織物の製作過程を確認し、100 年以上前に途絶えた織機の復活の可能性を探った。糸作りと現代の織物の製作過程についてはブリヤート共和国の中心都市ウラン・ウデ市に在住する工芸家と、イルクーツク州ウスチ・オルダ村の工芸組合の職人たちから学んだ。彼らの織物の素材はウマのたてがみの毛である。それを紡錘車をまわしながら紡いでいく。紡錘車は綿糸を作るものよりも大型である。現在のウマの毛の織物は、絨毯織りと同様の枠機を使った壁掛け制作と幅の狭いつなぎ目綜統を使う帯織しか残されていない。帯織で興味深かったのは、つなぎ目綜統を開孔板綜統と同様に使う点だった。

しかし、100 年前までは中央アジアと共通する地機（ground loom）が使われていたことが知られており、2018 年と 19 年の調査では、ポポフの論文（Попов, А. П. 1955 Плетение и ткачество у народов Сибири в XIX и первой четверти XX столетия. Сборник музея антропологии и этнографии, XVI, стр. 41-146）の 129 ページに掲載されているスケッチから研究代表者がその模型を制作して、現地で確認することにした。ウラン・ウデではそのような織機をブリヤートが使っていたことを覚えている工芸作家はいなかったが、ウスチ・オルダでは記憶されていて、それを復元しようという機運が見られた。ウラン・ウデの博物館（ザバイカル諸民族博物館）とともに、ウスチ・オルダにも古い織機で織られた 100 年以上前の織物の現物が残されていた。

ブリヤートに関する調査は 2018 年 8 月と 2019 年 8 月に実施し、研究代表者の他、研究協力者の宮地鼓と海外研究協力者のオリガ・シャグラノヴァが参加した。

4.2.2. ロシア連邦サハリン州

第 3 にあげるべきはロシア連邦サハリン州にあるサハリン州立郷土博物館所蔵のアイヌ衣装の調査である。ここは戦前樺太庁博物館と呼ばれた博物館で、19 世紀末のロシア領時代、1905～45 年の日本領時代に収集された資料が収蔵されている。ここでは改めて樺太アイヌ特有の文化、すなわちイラクサ（蓴麻）繊維を織って作られた衣装（テタラベ）と樺太アイヌ特有の文様、さらには周辺のニヴフやウイльтаの衣装との比較を行った。この博物館での新しい知見では、展示されていた織機にかけられていたタテ糸がイラクサ繊維と白い綿糸、ヨコ糸がイラクサ繊維で、この織機がイラクサと綿の交織織物を製作する途中の状態を表していたことと、博物館の学芸員からイラクサの茎から繊維を取り出す方法を教わったことをあげることができる。白い木綿とイラクサ繊維の交織織物を使った着物は平取町立二風谷アイヌ文化博物館で 1 点確認している（タテ糸に白の綿糸とともに藍染めの綿糸も使われているために縦縞模様が見られる）。白い綿糸と白いイラクサ繊維の交織では白い布ができあがるので、一見交織であることに気がつかない。それにどのような意味や効果があるのかは不明だが、20 世紀前半にそのような織り方がなされることが珍しくなかったことは確かなようである。

サハリンでの調査は2018年4月と2019年1月に実施し、研究代表者、研究分担者の齋藤玲子、研究協力者の田村将人と宮地鼓、海外研究協力者のアンナ・レスコフスカヤが参加した。

4.2.3. ロシア連邦カムチャツカ地方

カムチャツカ半島の南部でアイヌの平織の断片が発掘されていたことは、A. K. Пономаренко, *Древняя культура ительменов восточной Камчатки*, 1985, Москва: Издательство «Наука» p.46 で知られていた。その現物を確認するために、カムチャツカ地方総合博物館に赴いたが、その現物は既に失われていた。しかし、元学芸員で現在カムチャツカ国立大学のプタシェンスキー教授の協力で、展示場に展示されていた新石器時代から18世紀までの各地層から出土した繊維遺物と、収蔵庫に保管されていたガルガン II 遺跡出土の草皮繊維の断片の調査が許可された。その内、ガルガン II 遺跡のものは永久凍土層から出土したもので、保存状態がよく、もじり織り組織を明確に見て取ることができた。教授の計らいでいくつかの断片を日本に持ち帰り、その材料と年代の分析を行った。その結果、教授が述べていた500年ほど前という年代よりも遙かに古い1300年ほど前という結果が出された（報告書の右代論文の付録を参照）。その解釈についてはさらなる調査と分析が必要である。

カムチャツカでの調査は2017年2月に実施し、研究代表者と研究分担者吉本忍、研究協力者右代啓視が参加し、分析結果は2019年10月に出された。

4.3. アイヌの工芸家の協力による調査の成果

4.3.1. オヒョウの皮剥作業の調査

オヒョウの鞣皮から糸作りまでの行程は二風谷民芸組合のご厚意で調査をさせていただいた。樹皮剥ぎの調査は2017年、18年、19年のいずれも6月に実施し、2018年の調査では国立アイヌ民族博物館準備室で皮剥から糸作り、そしてアットウシを織り上げるところまでを映像記録に撮り、博物館の展示に活用する。この調査には研究代表者の他、研究協力者の宮地鼓が参加した。

4.3.2. オヒョウ繊維を續んで作った糸によるアットウシ織り

この調査は二風谷の布作り職人のご厚意で実施した。従来の糸作りでは取り出した繊維を機結びでつないで長い糸にするが、今回は糸の端を擦り合わせてつなぐ（續む）という方法に挑戦していただき、さらにその糸でアットウシを織ってもらった。その成果である何種類かのアットウシの見本は国立民族学博物館に保管されている。樹皮繊維の糸績みは本州でシナノキの繊維で糸を作るときに行われるが、アイヌのオヒョウの糸作りでは記録がない。オヒョウの繊維の場合、文化変化によって消滅したという仮説の下に、「復活」を目指したが、実際に制作した人によれば、織機に掛けても績んだ部分が外れることがあり、織りにくかったという。オヒョウ繊維を績まないのは、繊維の性質による可能性もある。

この調査には研究代表者、研究分担者の吉本忍、齋藤玲子、研究協力者の宮地鼓が参加した。

4.4. 全体として

アイヌを中心としてユーラシアの北方諸民族の織りに関する技術と文化について調査研究を行ったが、固有の繊維（樹皮、草皮、獣毛など）と独自の織機（平織織機、もじり織機など）を使用した織りの技術と文化は、広く北方ユーラシアにも普及していたはずだが、現代まで維持していたのはアイヌとプリヤートだけであった。今回の調査でそれが明確に浮き彫りになるとともに、アイヌの織布技術と文化が他に比べるとずば抜けて多種多様で、かつ洗練されていたことが判明した。アイヌが維持しえた理由は、彼らを取り巻く政治的経済情勢も考慮に入れないといけないが、何よりもその多様性と維持しようとする強い意志（民族アイデンティティの拠り所となっている）が大きな要因であることがわかった。プリヤートも同様に、平織用の地機は消滅したが、壁掛けや帯など馬のたてがみの糸を使った織物は、やはりプリヤートの民族アイデンティティの拠り所の一つだった。

アイヌが利用した外来の布素材の由来、年代については十分な分析ができなかったが、これは将来の課題としておく。ただし、それを詳しく調べると、19世紀中期までのアイヌが北東アジア世界で独自の地位を確立し、周辺諸民族の社会に一定の影響を持っていたことがわかってくるとい見通しは立てられた。また外来布の変化がアイヌの近代史を体現していることもわかってきている。北東アジアの歴史は博物館資料からも見直す必要があるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐々木史郎	4. 巻 227
2. 論文標題 シベリアと周辺世界のつながり 織物技術の視点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 114-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 池谷和信・佐々木史郎・岸上伸啓・戸田美佳子	4. 巻 42-3
2. 論文標題 最近の狩猟採集民研究の動向：第11回国際狩猟採集社会会議（CHAGS11）に出席して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 321-372
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 齋藤玲子	4. 巻 特大号
2. 論文標題 特別インタビュー 北海道平取町二風谷、産地が守るアイヌ伝統工芸 多様化する社会環境と先住民族の文化継承	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 別冊Muse 地場産業 伝統と革新の軌跡	6. 最初と最後の頁 70-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐々木史郎	4. 巻 41巻8号
2. 論文標題 シーボルト家収集のアイヌコレクション	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木史郎	4. 巻 2号
2. 論文標題 ナーナイの人々に愛された植物	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小原流 挿花	6. 最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮地 鼓、吉本 忍、佐々木史郎	4. 巻 4号
2. 論文標題 苫小牧市美術博物館所蔵のアイヌ衣服の繊維素材について その	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 苫小牧市美術博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藪中剛司、宮地 鼓、山道陽輪	4. 巻 17号
2. 論文標題 ニカリの物質文化的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告	6. 最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉本 忍、宮地 鼓	4. 巻 1
2. 論文標題 チャシコツ岬上遺跡出土炭化繊維遺物の分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 チャシコツ岬上遺跡報告書総括報告書	6. 最初と最後の頁 117-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Sasaki Shiro, Nakai Takanori, Kitajima Yuki, Yahata Tomoe
2. 発表標題 The Ainu as indigenous people and a national museum
3. 学会等名 Trendy fifth ICOM General Conference in Kyoto, (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木史郎
2. 発表標題 ハンティの織機と織物
3. 学会等名 第5回日本シベリア学会研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sasaki Shiro
2. 発表標題 Construction of a national museum for revitalization of the Ainu culture
3. 学会等名 Twelfth International Conference on hunting and Gathering Societies (CHAGS XII) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sasaki Shiro
2. 発表標題 Challenges of the National Ainu Museum: Creation of the museums together with indigenous communities
3. 学会等名 ICOM MAIZURU Meeting 2018: Museums and Cultural Heritage as Cultural Hubs (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshimoto Shinobu
2. 発表標題 Looms for Warp-Twined Weave and Weft-Twined Weave in Japan
3. 学会等名 World of Looms: Weaving Technologies and Textile Arts in China and Other Countries (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sasaki Shiro
2. 発表標題 Weaving techniques in subarctic areas: Their prosperity and decline in Northeast Asia
3. 学会等名 Fifth International Symposium on Arctic Research (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木史郎
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 公開研究会 『北方寒冷地域の衣文化交流：釧路市立博物館所蔵のアイヌ民族衣服を中心に』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉本 忍
2. 発表標題 アイヌの衣服から見てきたこと
3. 学会等名 公開研究会 『北方寒冷地域の衣文化交流：釧路市立博物館所蔵のアイヌ民族衣服を中心に』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤玲子
2. 発表標題 北方寒冷地域の衣文化交流
3. 学会等名 公開研究会『北方寒冷地域の衣文化交流：釧路市立博物館所蔵のアイヌ民族衣服を中心に』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮地 鼓
2. 発表標題 アイヌ民族資料を科学の目でみる
3. 学会等名 2017年度苫小牧市美術博物館大学講座
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮地 鼓
2. 発表標題 異文化交流から見える新しい北東アジアの歴史像 アイヌ民族資料を科学の目でみる
3. 学会等名 公開研究会『北方寒冷地域の衣文化交流：釧路市立博物館所蔵のアイヌ民族衣服を中心に』（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐々木史郎、吉本忍、日高真吾、和高智美、齋藤玲子、右代啓視 ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京国立博物館 国立アイヌ民族博物館設立準備室	5. 総ページ数 160
3. 書名 アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉本 忍 (Yoshimoto Shinobu) (10124231)	国立民族学博物館・その他部局等・名誉教授 (64401)	
研究分担者	齋藤 玲子 (Saito Reiko) (20626303)	国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・准教授 (64401)	
研究分担者	日高 真吾 (Hidaka Shingo) (40270772)	国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・教授 (64401)	
研究協力者	宮地 鼓 (Miyaji Tsuzumi)	公益財団法人アイヌ民族文化財団・国立アイヌ民族博物館運営準備室・研究員	
研究協力者	田村 将人 (Tamura Masato)	東京国立博物館・国立アイヌ民族博物館設立準備室・主任研究員	
研究協力者	右代 啓視 (Ushiro Hiroshi)	北海道博物館・研究部・研究部長	
研究協力者	城石 梨奈 (Shiroishi Rina)	釧路市立博物館・学芸員	
研究協力者	中村 和之 (Nakamura Kazuyuki)	函館工業高等専門学校・教授	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	福田 絵梨子 (Fukuda Eriko)	苫小牧市美術博物館・学芸員	
研究協力者	和高 智美 (Wadaka Tomomi)	合同会社文化創造巧芸・代表取締役	
研究協力者	シャグラノヴァ オリガ (Shaglanova Ol'ga)	ザバイカル地方諸民族博物館・客員研究員	
研究協力者	レスコフスカヤ アンナ (Leskovskaia Anna)	サハリン州立郷土博物館・研究員	